高尾山報 令和6年11月号 毎月1回発行 通巻第730号

令和七年 高尾山中興開山六百五十年

高尾山報

令和6年 11 月号

雨中の高尾山を練行し、お大師様と御縁を結ぶ

法の水茎

大正大学講師　髙橋秀城

(149)

もみぢ葉の
流れざりせば
たつた河
水の秋をば
誰か知らまし

（『古今集』坂上是則）

（もみじ葉が散って、このように水に流れなかったならば、竜田川の「水の秋」を誰が知るだろうか）

紅葉の色づき具合はいかがでしょうか。夏を引きずった暑さが十月末まで続いたこともあり、秋色の訪れが少し遅れているようです。今年の冬の始め（立冬）は十一月七日。短い秋の深まりを全身で感じながら、心穏やかな日々を過ごすことができればと思います。

冒頭の「もみぢ葉の」の歌では、川に散り敷いた紅葉が詠われています。奈良県北西部を流れる「たつた河」（竜田川／立田川）は、古来から紅葉の名所として知られていますが、その川面にも色とりどりの葉っぱが浮かび流れていたのでしょう。清らかに澄み切った「秋の水」に柔らかな秋の陽光が降り注いでいたのでしょうか。まるで錦織のように輝いていた光景が目に浮かびます。木々の梢から葉が落ちても、秋の面白みが尽きることはありません。

弘法大師空海（七七四～八三五）もまた、秋の風情を歌に込めました。

花といひ
紅葉と名のみ
立田山
同じ梢に
通ふ木枯らし

（『弘法大師全集』）

（春は桜、秋は紅葉が名高い立田山だけれど、思えばどちらの梢にも吹きすぎる木枯らしの風よ）

「木枯らし」は、冬の到来を告げる冷たい北風です。この和歌でお大師さまは、春の桜花も秋の紅葉もいずれは風に散って、結局は「同じ梢」（同じ枝先）に還っていくということを詠っているようです。

ちなみに、歌の前に置かれた詞書には「生死即涅槃の心を」と記されています。難しい言い回しですが、仏教語「生死即涅槃」とは「生と死の苦しみも、そのまま悟りの縁となる」という教えになります。それを踏まえて味わえば、毎年のように梢に咲いては風に舞い、梢に色づいては散っていく自然の循環の中に「悟り（真理）の世界」が表れていると解釈できるでしょうか。若き頃より山野での厳しい仏道修行を積まれたお大師さまだからこその「悟りの和歌」と言えるでしょう。

さて、真言宗のお寺を訪ねると、石や青銅で造られたお大師さまの像を境内でよくお見かけします。これは「修行大師像」（「遍路大師像」とも）と呼ばれるものです。袈裟を身につけ網代笠をかぶり、右手に錫杖を立て、左手には念珠（「仏鉢」や「五鈷杵」の場合もあり）、足には脚絆（布）、草履を履いた出で立ちは、まさに全国を歩かれ多くの人々の苦しみを救われたお大師さまのお姿です。髙尾山薬王院にも、参道男坂の石段の登り口にお立ちになって、いつもお参りの方々の安全を見守っていらっしゃいます。

髙尾山薬王院の修行大師像

ちなみに、私が住まうお寺（普濟寺）にも、修行大師の石像が聳え立っています。この像をめぐっては、先代の亡き父がこんなことを話していました。

明治時代の話。岡田海恵という若い僧侶がいました。ある雪の日に修行のために歩いていると、疲れや寒さのために行き倒れてしまいました。どこか休むところがないかと見回したときに、近くにあったのが普濟寺というお寺でした。

岡田僧正は縁を感じられたのでしょうか。明治二十四年（一八九一）七月に無住であった普濟寺に入り、二十五世住職となられました。二十四歳の時でした。

僧正は、その後も仏道修行に励みました。やがて四国八十八箇所の遍路を思い立つと、一度ならず二度もの巡拝を成し遂げたのでした（昭和十一年（一九三六）五月成満）。それは実に六十八歳の満願（願いが叶うこと）でした。

地域の人々は、僧正の功績を広く世間に知らせようと石像の建立を思い立ちます。浄財を集めて、昭和十一年（一九三六）八月二十五日に開眼供養を行ったのが普濟寺の「修行大師像」です。そのお姿には、お大師さまと僧正の面影が重ね合わされているのです。

（前住職談）

両度にわたるお遍路は、おそらく命がけの旅路でもあったでしょう。功績をたたえた「修行大師像」の建立によって、遠く遍路が出来ない人であってもお大師さまとつながることができるようになったのです。

南無大師遍照金剛

全国に立たれている「修行大師像」には、これまで多くの祈りが捧げられてきました。お大師さまはその願いを一つ一つお聞きになり、身代わりとなることを決意して、今も歩き続けていらっしゃるのでしょう。

（栃木北部教区普濟寺）

トヨタホーム株式会社 安全大会特別講演

十月十七日（木）

十月十七日、新宿区の牛込箪笥区民ホールにおいて行われた「トヨタホーム東京株式会社安全大会」において、佐藤貫首がトヨタホーム東京協力工事会社の作業員三百人を前に、髙尾山の歴史や修験道について講演致しました。

東京日野ロータリークラブ卓話

十月十六日（水）

日野市内の桃源院青雲において、東京日野ロータリークラブの例会が行われ、佐藤貫首が卓話されました。信仰の場として髙尾山、また修験道についてお話しされました。

未来を担う子どもたちの健やかな成長を祈る　十月十七日(木)

高尾山秋季大祭厳修

天蓋のお手縄を手に取り歩むお稚児さん

「秋季大祭」の旗を先頭に行列は長く続く

鼓笛隊の賑やかなマーチと共に進む

健やかな成長を願い誕生仏に甘茶を灌(そそ)ぐ

一年間を共にした舞扇を供養する八王子芸妓衆

熱祷する佐藤貫首

有喜苑における柴燈大護摩供厳修

侍装束に身を固めた高尾山慶賛会の皆様

本堂で祈るお稚児さん

大本堂で御詠歌を奉詠

観音菩薩の宗教 ㊸

国際教養大学特任教授　金岡秀郎

如意輪観音（その21）

すでに三年を閲したが、本連載において二一回に亙って観音菩薩の転生について論じた（「観音菩薩の宗教㊳～㊾」）。それらを要約すると、観音菩薩は今生において聖徳太子に転生したり、弘法大師に生まれ変わったりしたと信ぜられてきた。当初、聖徳太子の本地は観音菩薩のなかでも救世観音とされたが、後に如意輪観音とも言われるようになり、鎌倉期の『水鏡』では弘法大師の本地として如意輪観音の名が挙がるようになった。また、聖徳太子は自らの来世も予言し、聖武天皇となって東大寺を建立するであろうと語ったとされた。毘盧遮那仏の脇侍として大仏殿に祀られているように、東大寺において如意輪観音信仰は重要な位置を占めてきた。こうした信仰は、飛鳥以来の日本仏教史を貫く観音菩薩の思想史的系譜であり、如意輪観音信仰の系譜を示すものと捉えられる。

旧稿の要約が長くなったが、今回は、鎌倉仏教の高僧のひとりである親鸞と如意輪観音のつながりについて述べてみたい。

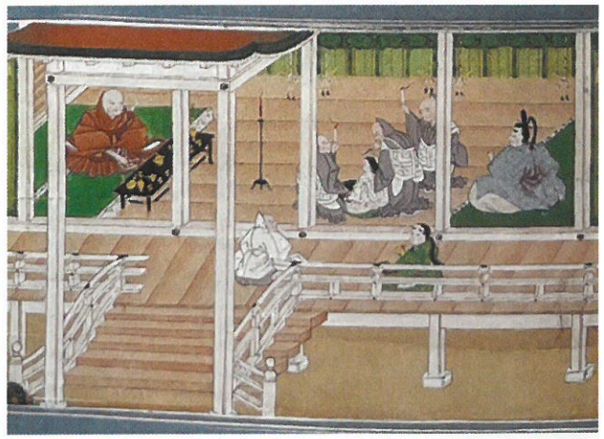
親鸞はその生涯において人生を決する三つの夢を見ている。真宗高田派専修寺にはその夢を記した「三夢記」が伝えられている。文献学的に「三夢記」には親鸞の真撰・偽撰の両説があるが（松野純孝『親鸞―その行動と思想』評論社、一九七一年、七六～七七頁。石田瑞磨『苦悩の親鸞―その思想と信仰の軌跡』有斐閣、一九八一年、二三～二四頁）、親鸞の署名とともに各々の夢の日時と場所が記されており、思想史上、意義深い内容を伝えている。以下に先ず、第一の夢を見てみよう。

第一の夢は建久二年（一一九一）九月十四日夜、十九歳の親鸞が河内国磯長の聖徳太子廟に参籠したときのものである。親鸞の夢に聖徳太子が現れ以下のように告げた。すなわち、聖徳太子の親鸞への夢告である。原文の漢文は（　）に入れた。

「我が三尊は塵沙の界を化す　日域は大乗の相応の地なり　諦に聴け、諦に聴け、我が教令を汝が命根は応に十余歳なるべし　命終りて速に清浄土に入らん　善く信ぜよ、善く信ぜよ、真の菩薩を（我三尊化塵沙界日域大乗相応地　諦聴諦聴我教令　汝命根応十余歳　命終速入清浄土　善信善信真菩薩）」

高田派の五天良空の『親鸞聖人正統伝』（正徳五年［一七一六］。龍谷大学所蔵本、三〇頁。https://da.library.ryukoku.ac.jp/view/210140/1）によると、親鸞は九月十二日、太子を葬った磯長の廟に参詣し、十三日から十五日までの三日間、参籠した。その二日目の夜、太子が廟内より右の扉を開いて赫々とした光を放って身を現し、お告げをしたという（石田前掲書、二九頁）。石田瑞磨によれば、上述の三尊は聖徳太子とその母と后を指す（同、三〇頁）。以下はそのお告げの拙訳である。

「私たち三人は塵にまみれたこの濁世を（仏教で）教化してきた。（それより見れば）日本は大乗仏教に相応しい土地である。よく聴きなさい、よく聴きなさい、私の教



松若麿（親鸞）得度受式の図。右より四人目に剃髪される松若麿。一番左に師の慈円僧正。『本願寺聖人伝絵』第二図。康永二年（1343）。東本願寺蔵。重文（『親鸞聖人伝絵―御伝鈔に学ぶ』本願寺出版、一九八七年、口絵）

えを。汝（親鸞）の寿命は十余年であろう。（しかし）命が終われば速やかに清浄なる世界（である浄土に）生まれるであろう。（汝が）真の菩薩であることを善く信じなさい、善く信じなさい」

十九歳だった親鸞（当時の名は範宴）にとって、「十余歳」が「今から十年余り」なのか「寿命が十代まで」なのかは、このお告げからはわからなかった。『親鸞聖人正統伝』（同上、三一頁。引用では句読点とルビを付した。以下同）によれば、親鸞はこのお告げについて「汝命根應十余歳ノ文意サトシ難ク思召ケリ。範宴イマ十九歳ナレバ、今年マデノ壽限ト云コトニヤ。又今ヨリ十余歳トノ義ニヤ」と解し難く思っていた。しかし「其後二十九歳ニ至テ、浄土眞門ニ入リタマフ上ニテ、当初ノ告令ニ十余歳ニ至テ清浄國土ニ入ントハ、今此時ヲ示サレケルヨト、日来ノ疑蒙ヲ晴タマヒケリ」とし、十年後に心が晴れたとしている。石田瑞磨も、『親鸞聖人正統伝』を引用していないが、この「死の宣告」から三ヶ月経って二十歳を迎えることによって解消したはずと述べている（同、三一頁）。疑念が晴れた親鸞は以後、天台教学の研鑽に励むことになる。

上記の夢は親鸞が十九歳の時すでに太子廟に詣で、太子が夢に現れるほどの熱烈な信仰を持っていたことを示しているが、先の『親鸞聖人正統伝』の所伝によれば、親鸞の如意輪信仰との関係は、親鸞誕生の砌まで遡ることができる。それによれば、親鸞の母・吉光女は親鸞を懐妊する際に如意輪観音が夢に現れたという。如意輪観音は五葉の松を指し出して、「汝は常人とは違う（優れた）子を生むだろう。その子にはこの松を以て名前としなさい」と述べたという。親鸞の幼名が松若麿もしくは松若丸とされたのは、吉光女が受けた如意輪観音の指示によるとされる。『親鸞聖人正統伝』の原文は以下の通りであるが、筆者が句読点と濁点とルビを入れた。

「御母吉光女、ツ子ニ菩提心フカシ。或夜、シキリニ浮世ノ無常ヲ觀じ、西首シテ臥タマフ。其夜ノ夢ニ、西方ヨリ金色ノ光明カゝヤキ来リ、身ヲ遶ルコト三匝シテ、口中ニ入コト箭ノ如シ。夢中ニ驚テ西方ニ向タマヘバ、一ノ菩薩マシ〳〵、長一尺許ノ五葉ノ松一本ヲ持、コレヲ授テ言ク、吾ハ如意輪也。汝奇異ノ児ヲ生ゼン、必ズ是ヲ以テ名トスベシト云云」（同上、二〇頁。）

偉大な宗教家や政治指導者には誕生にまつわる奇瑞がしばしば伝わり、それは必ずしも史実と実証できるわけではない。しかしながら、伝説や神話はその人の後の人生を予知させる内容を含むことが少なくない。ブッダの七歩伝説、聖母マリヤの処女懐胎、ムハンマドの誕生奇瑞、チンギス・ハーン誕生の挿話、最澄や空海の母の懐妊の夢や、聖徳太子の母の懐妊の奇瑞（「観音菩薩の宗教㊳」）など枚挙にいとまがない。近年では法然や親鸞の史実と伝説の乖離を厳しく、また鋭く指摘する見解もあり（島田裕巳『ほんとうの親鸞』講談社現代新書、二〇〇二年。本郷和人・島田裕巳『鎌倉仏教のミカタ―定説と常識を覆す』祥伝社新書、二〇二四年）、そうした指摘は興味深いが、宗派内部の研究者や信者には不可能な説もあろう。筆者自身も真言宗の法脈にあって、弘法大師を客観視するよう努めたとしても、評価こそすれ毀損するのは躊躇う気持ちが起きるであろう。とはいえ、伝説や神話を科学的事実ではないとして捨象すれば、思想史的研究は不完全となる。親鸞の母の場合も、史実か否かの検証以前に思想史的意味を見出すことが重要であろう。親鸞は母の胎に宿る時すでに如意輪観音と密接な関係を有していた。別の仏教語を借りれば、親鸞は「父母未生以前（父や母が生まれる前の前世）」より如意輪観音と縁があり、恩があったことになる。こうした信心は、現代の真宗信者、門徒の人々に継承されている。

聖徳太子は救世観音、ことにこの時代は如意輪観音の生まれ変わりと信ぜられており（石田前掲書、三〇頁）、親鸞が太子廟に詣でたのも、かかる仏縁によるものと考えてよい。父母未生以前の如意輪観音の恩は、その生まれ変わりの聖徳太子に繋がり、親鸞の篤い信仰となり十九歳の参籠に際しての夢告となった。その後、親鸞二十九歳の時、如意輪観音は再び夢に現れる。「三夢記」の伝える第二の夢である。これについては次回に考察することとする。

修行を通して大自然の中で自らを見つめ直す

第百二十三回 信徒峰中修行会

十月十二日（土）～十三日（日）

高尾山全体を修行道場とする「第百二十三回高尾山信徒峰中修行会」が爽やかな秋晴れの中で開催されました。

山麓の不動院を出立した先達と修行者の約三十名の一行は、琵琶滝にて滝行を修し、尾根道を行く稲荷山コースを登って山上を目指しました。その途中、高尾山を中興された俊源大徳が御本尊飯縄大権現様を感得したと伝えられる炊谷にて法楽をお勤め致しました。

翌日未明、宿坊を出発して暗闇の山中を練行し、早朝の御護摩修行に参列されました。朝食後には、埼玉第二教区・不動山金剛寺住職の岡野忠良先生による、「感謝～過去と現在の私～」と題された法話を聴講されました。

その後有喜苑において、佐藤貫首大祇師のもと柴燈大護摩供が厳修され、修行者の皆様も共に祈りを捧げられました。

柴燈大護摩供にて一心に祈る

琵琶滝で滝行を修す

岡野忠良先生による法話

山中を行く修行者一行

夜明け前の神変堂で法楽をお勤めする

高尾山内八十八大師巡拝

十月八日（火）

しとしと降り続く秋雨の中、恒例の高尾山内八十八大師巡りが行われ、総勢三十二名の方が参加して高尾山中を巡拝し、お大師様（弘法大師）との御縁を深められました。

巡拝は先達の僧侶とともに、山麓の不動院から蛇滝水行道場を経由して大本堂まで徒歩練行を行い、雨具を着て歩きづらい中でも、急峻な山道では「慚愧懺悔　六根清浄」と掛念仏をお唱えしながら登り、道中で各お大師様に法楽をお勤めしました。

山上に到着し、大師堂周辺の八十八大師御砂踏み霊場を巡った後、大本堂にて御護摩修行に参加されました。精進料理を召しあがった後には、一号路を下りながら道中の各お大師様を巡拝して不動院に到着。その後は不動院にて巡拝の成満を御本尊様に奉告する献灯式が行われました。

大師堂前での記念撮影

不動院で献灯式が行われた

高尾山の昆虫

ハスオビヒゲナガカミキリ

181

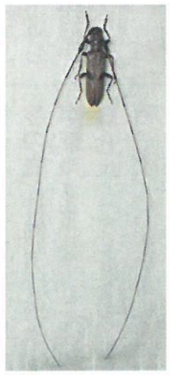
日本産のカミキリムシは千種に近い数がいて、形状や生態も様々であることが知られています。

そのカミキリのシンボルともいえる触角は種によって多様化していて、中でも一際長い触角を持っているのが今回取り上げたハスオビヒゲナガカミキリ（斜帯髭長天牛）です。

体長は一センチ内外ですが、オスは体の四倍を超えるような長大な触角を持つ本種は実に見事で、高尾山の灯火で出会いびっくりしたのを覚えています。ややスリムな体型で触角の第一節は下部が瘤状に膨らみ、全体的に灰褐色ながら上翅の中央には逆八字の黒紋が入り、これがハスオビの和名の由縁になっています。

高尾山では灯火で数回見かけただけで、その後ＬＥＤライトに換えられたこともあり再会は難しいと思っていましたが、不思議にＬＥＤにも飛来するようです。

多い種ではなくタマアジサイ等のビーティング（叩き網）で比較的見つかるようですが、この異様に長い触角がどんな役割を果たしているのかも連想しながら、ルッキングで探して見るのも一興だと思います。



（標本・小畑　裕　撮影・文　松島　孝）

高尾山年代記 59

歴代山主の事跡をたどる

明治大学博物館　外山　徹

十八世秀神17　信仰の山、全山の様相

徳川幕府の官撰地誌『新編武蔵風土記稿』（一八二三「多磨郡之部」成立、以下『風土記稿』と略す）の存在により、今日、我々は約二〇〇年前の高尾山内の様子を詳さに知ることができる。寛政二年（一七九〇）の「当山絵図面下書」の段階では山上の伽藍と一之鳥居周辺の様子が判明したが、それ以外の山中に分布する堂宇の位置関係は皆目見当がつかない状態であった。

一之鳥居と清滝

『風土記稿』の記述は山上の伽藍に続き、「以下境内山中にあるものを記す」としている。ここからは、絵画史料として希少な挿絵と合わせながら、その実相を見てゆこう。

一之鳥居とそれに向かって右手脇に不動院があったこと、また、その周辺に寺領民の家屋のあったことは「当山絵図面下書」に示されていたが、それは四角い升目が並ぶだけでいかにも抽象的だった。『風土記稿』の挿絵が実際の光景にどこまで忠実であるかは留保の余地があるものの、本文や同時期の史料にも照らして解釈してゆきたい。

一之鳥居と清滝（同）

一之鳥居は山麓の表参道（現在の一号路）始点にあり、「柱間二間控柱付」とあるので、柱と柱の間が約三・六メートル、厳島神社のような六本足の鳥居であった。不動院は薬王院の末寮とされ「六間に三間半」とある奥行きに対し間口がかなり広い方形の建物で、六畳間が七つも取れる広さがある。「構えは二十坪ばかり」と建坪に対して敷地はさほど広くなく、挿絵の緩やかな斜面に石垣を組んで平坦な敷地を確保していた様子は、同時期の紀行文や後の地誌の挿絵にも見える。

不動院の向かいにある清滝を開削した経緯は連載第38回に述べたが、「水源は琵琶滝下流の分水なり」と、流路を含めて人造の滝であったことがわかる。高さの一丈四、五尺（約四メートル半）は現在よりも高い印象である。滝の下には池があり、中央に橋のかかる島がある。「雨宝弁天の池」とされ、十七世秀興の筆による清滝の由来を刻んだ石碑と「天満社」の小祠があった。池からの小流は前沢川（琵琶沢川）に注いでいる。清滝に向かって左の方、現在のケーブル清滝駅前の広場から駅構内にかけての平坦地には耕地が開けており、「麓民家」として、山際に寺領民の家屋が並んでいる様子がわかる。さらに左方には「ヒハ（琵琶）滝道」の表示があり、奥へ道が続いている。

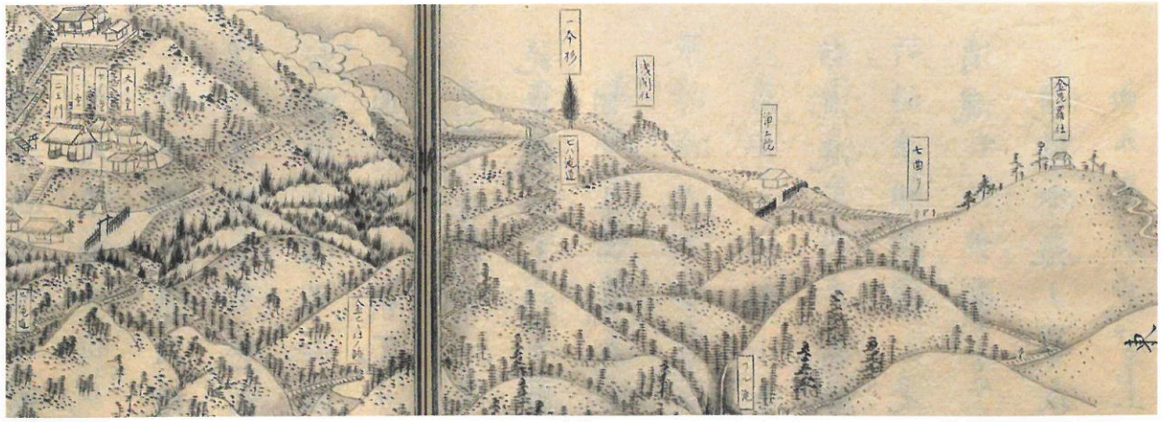
表参道

一之鳥居をくぐった先には杉の並木が続き、向かって右手へ道が屈曲する谷頭の位置に「フル滝」の文字がある。本文にある「布留滝」のことで、「参詣の人々この所にて垢離する」とのこと。元来、岩肌を這うように落ちる滝で水量は少なく、現在は涸れてわずかに湿気を帯びた岩肌が往時を偲ばせる。大正の頃までは休息所もあった。

布留滝から登山路は二回の屈曲で尾根筋に出る。「七曲り」の文字がある通り、この辺りは険しい斜面に羊腸屈曲した路が続くと言われていたが、それは古のことか、一九世紀初めの時点ではすでに現在と同じ道筋が整っていたことになる。

尾根筋の右方は小高く描かれ「金毘羅社」がある。その先には屈曲した山道が下っており、これは寛政七年（一七九五）に江戸の文人石永貞が悪戦苦闘して登った（第46回）、古い時代の表参道と言われる道筋のようだ。

尾根沿いに参道を進むと黒い柵があり、「浄土


布留滝から尾根筋の道へ（『新編武蔵風土記稿』国立国会図書館デジタルアーカイブ・部分）

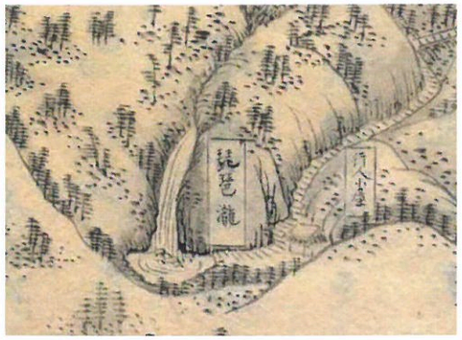
院」という「寮」がある。五間に二間半というので間口九メートルである。現在の城見台の辺りのはずだが、この規模の仏堂があったにしては敷地が狭隘な印象はまぬかれない。続いて「浅間社」「一本杉」「ビハ滝道」の表示がある。通説の通り一本杉が現在の蛸杉であれば、この琵琶滝へ降りる口は本来その手前の霞台でなければならないが、道筋が現在と異なるか、あるいは実際の位置関係を反映していないものだろうか。浅間社は奥之院と合わせて二ヶ所があった。「寺より十四丁を隔てて」とあるので、現在茶屋のある十一丁目から三〇〇メートルほど下った場所だが、残念ながら現在地は不明である。

その先、「寺を距てる事十丁余」「側に杉一本あり」という位置に妙見社があるとする。十一丁目から一〇〇メートル余、まさに蛸杉の脇なのだが、現存は確認できない。明治維新の神仏分離の折に撤去された多くの小祠の中に含まれたのだろうか。その先二〇〇メートルなので、現在の男坂と女坂の分岐より手前となるが、弘法大師の石像があったという。挿絵には一本杉の先に道標らしき標柱があり、そこから先は広庭入口の黒門まで目立った描写はない。この間、道沿いには大杉の並木は描かれておらず、その記述もないので、ひょっとすると現在とは異なる道筋があったのかもしれない。

琵琶滝周辺

黒門の前から降りる道筋があり、「ビハ滝道」の表示がある。近年、四天王門前の崖から「是よりびわのたきみち」の道標が発見され、かつてそこから琵琶滝へ直降する道のあったことが証明された。挿絵の中では途中で道筋が山影に消えており、その先は定かでない。

本文では寺の東南の谷中に「雨宝陵」という小高い丘があり、雨宝童子と弁財天を祀る祠があるとする。挿絵に表示はないが、琵琶滝の背後には三角形の山容が描かれている。当時は琵琶滝から見上げたところに、小丘が認識されたようだが、現在は森林が繁茂して地勢は判別し難い。琵琶滝の右手には「行人小屋」の表示があり、本文は「垢離小屋」とする。すでに参籠者のある行場となっていたことがわかる。その脇から図中右上方へ道筋があり、道は斜面の手前に付いているので、現在の六号路ではなく霞台へ登る道筋のようだ。途中には「金ヒラ社ノ跡」という表示がある。



琵琶滝の周辺（同）

高尾山中にはそこここに仏堂・神祠が祀られており、さながら全山が神仏の鎮まる信仰の山という様相を呈していた。

おことわり　本連載では史料の引用について、適宜、読みやすく原文に手を加えています。

宗派を超えた声明が響く
京王沿線古刹「密教の祈り」
十月二日(水)

京王線沿線を代表する寺院の「天台宗別格本山 浮岳山昌楽院深大寺」と「真言宗智山派別格本山 高幡山明王院金剛寺」、「真言宗智山派大本山 高尾山薬王院有喜寺」の三ケ寺で、天台宗と真言宗という宗派を超えて声明を唱える京王沿線古刹「密教の祈り」が、夕暮れの高尾山麓の高尾599ミュージアムで開催され、深大寺の張堂興昭山主、金剛寺の杉田純一貫主と共に当山の佐藤貫首が出仕されました。

声明とは仏教における楽曲であり、お経や真言に旋律抑揚を付けてお唱えされます。真言声明と天台声明という異なる旋律でお唱えされる声明が会場内に響く中、参列された方々は深く聞き入っておられました。その後は会場を屋外に移して暗闇の中で柴燈大護摩供が厳修され、普段の賑やかな様子とは異なり会場は厳粛な雰囲気に包まれました。

天台僧と真言僧による
万国和平・国家安穏への祈り

高尾599ミュージアムで声明の音が響く

波多野重雄氏句碑建立除幕式
十月十三日(日)

このたび薬王院境内に、昨年逝去された波多野重雄氏の句碑が建立され、佐藤貫首導師のもと除幕式が行われました。

波多野氏は八王子市長を四期十六年務めるなど活躍されました。引退後には高尾山健康登山を始められ、百回満行（二千百回登山）を達成され、「高尾山健康登山の会」で会長を務められました。

また、高尾山報においては、『折り折りの記』という題で俳句とエッセイを長年寄稿されており、今回その中の一句、

瀧しぶき　風のはぐくむ　岩煙草（いわたばこ）

が刻まれた句碑が建立されました。

除幕式には施主であるご遺族と関係者が参列され、在りし日の波多野氏の思い出を語られておりました。

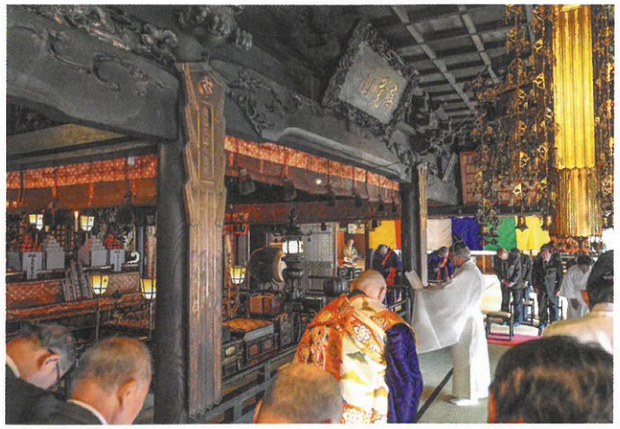
句碑を囲む御遺族の皆様

三寺社合同復興祈願祭厳修
十月九日(水)

北口本宮冨士浅間神社、大山阿夫利神社、高尾山薬王院の三寺社は、国土安穏や全国で発生した災害復興を祈る合同祈願祭を高尾山大本堂にて執り行いました。

この法要は、平成二十三年に発生した東日本大震災を契機として始まり、現在では様々な災害からの復興を祈るために毎年営まれており、三寺社による輪番制で主催して執り行っております。

大山阿夫利神社からは目黒宮司、北口本宮冨士浅間神社からは田邉禰宜を始めとした神職の皆様が参列されました。式では大祓詞の奏上と祭詞の奏上に続き、当山の佐藤貫首導師のもと特別開帳大護摩供が厳修され、世界平和や国土安穏、復興促進を一心にご祈願致しました。


本堂内で神仏への祈りが捧げられた

書院松の間にて撮影

立川立飛歌舞伎特別公演
中村壱太郎丈公演成功祈願
十月二日(水)

歌舞伎俳優の中村壱太郎丈が高尾山を訪れ、「立川立飛歌舞伎特別公演（十一月二十一日～二十四日）」の成功祈願を行いました。

この公演は立飛グループ創立百周年記念事業として行われます。その演目の一つに『玉藻前立飛錦栄（にしきえ）』があり、その中で壱太郎丈は九役の早替りを勤められます。演目の舞台は寛永期（江戸時代初期）の高尾山で、「寛永古鐘（かんえいこしょう）」と称される釣り鐘の供養が行われる場面があります。

壱太郎丈は、御護摩修行に参列して公演の成功と無事を祈り、その後、鐘楼堂脇に移動し、佐藤貫首導師のもと行われた寛永古鐘の供養に参列されました。

寛永古鐘の前で中村壱太郎丈と佐藤貫首

桑都八王子の文化と魅力を体験
第11回わくわくフェア

十月十九日(土)　主催・八王子商工会議所

八王子商工会議所が主催する秋の恒例行事「わくわくフェア」が、「未来へ紡ぐ伝統文化」をテーマに開催されました。

開式に当たり八王子の伝統文化を身近に感じてもらおうと「桑都八王子パレード」が行われ、日本遺産「霊気満山　高尾山」を構成する文化財を代表して、八王子消防記念会の皆様による木遣に続き、高尾山の山伏、そして八王子芸妓衆が西放射線ユーロードを練り歩きました。その後、普段は買い物客で賑わう横山町公園の特設会場において、佐藤貫首大祇師のもと、柴燈大護摩供を厳修し、参列された多くの方々と心を一つにして、世界平和や市民安全など諸願成就を御祈念致しました。

また、柴燈大護摩供の後には、八王子芸妓衆による『桑都の舞』が披露され、観客や道行く人々を魅了する華やかな一時となりました。

中心市街地での柴燈大護摩供が厳修された

樫﨑会頭による挨拶

八王子消防記念会による木遣

八王子芸妓衆による「桑都の舞」

おはなし散歩道

素直ってむずかしい

八王子市　池田美絵

ゆうかが校門を出たとたん、ぽつり、ぽつりと降り出した雨が、大雨に変わった。手さげ袋を頭に載せて駆けだしたが、雨は勢いを増し、家に辿り着くまでにはずぶ濡れになった。

「ただいまー」。家に着き、ほっとした声でドアを開けると、お母さんが出迎えた。「今迎えに行こうと思っていたのよ。大丈夫だった?」と、ゆうかにタオルを差し出した。

ゆうかは濡れて重たくなった服を脱ぎ、部屋着に着替えた。そして、同じくびしょ濡れになった手さげ袋から体操服を取り出したところ、四つに折りにたたまれた紙きれがポトンと床に落ちた。

(手紙?)。濡れてくっついて、ぺちゃんこになった紙切れを慎重に開く。だが青いインクが雨で流れ落ち、かろうじて数文字読めるだけだった。

「ぜっ……ね」。他の文字は、青いしみに変わって判読不可能だった。(もしかして、この字はあやちゃん?)。ゆうかは、先日の出来事を思い出して暗い気持ちになった。あやとは小学一年生の時から四年生になった今も同じクラスの仲よしだった。

きっかけは些細な食い違いだった。校長先生の名前が「いとうあきひこ」か「いとうゆきひこ」かというものだった。

ゆうかは「あきひこ」だと言ったが、あやは「ゆきひこ」だと譲らない。そんなやりとりが続き「絶対、あきひこだよ。10月生まれだし」とゆうかが強い口調で返すと、あやは急に泣き出した。

以来、会ってもプイと横を向かれるようになった。(私は間違ったことは、言ってない!)。ゆうかは強気だったが、冷たい態度が一週間も続くと、さすがにこたえる。そんな時に入っていた手紙だった。(もしかして〝ぜっこう〟なの?)。悪い方向にばかり考え、ゆうかは落ち込んだ。

夕飯の時間になり、大好物のから揚げが食卓に並んだ。「今日のから揚げおいしくできたわよ」。でも今夜は箸が進まない。ゆうかは夕飯を味わう心境ではなかった。

「あやちゃんとけんかしちゃったの」。耐えきれずゆうかが打ち明けると、いきさつを聞いてくれたお母さんはこう言った。「自分から声をかけてみたらどうかな」。「だけど校長先生の名前はあきひこだし、私は間違っていない」と、ゆうかが言うと、「そこにこだわらない。あやちゃんと友だちでいたいんでしょ」と、励ましてくれた。

自分から声をかけるよう促されると、今度は(声をかけて無視されたらどうしよう)と違う気持ちがわいてきた。ゆうかは不安のまま床に就いた。

翌朝、教室に入るとあやは窓のところに立っていた。ゆうかは「おはよう」と声をかけるだけで精いっぱい。すると、あやがかけ寄ってきた。「ゆうかちゃん、ごめんね」。そのひとことで、ゆうかの緊張は一気にほぐれた。

「ほんとは、途中で自分の間違いに気づいたの。でも泣くことしかできなくて」と、あや。「ううん。私のほうこそきつい言い方しちゃった」と、ゆうかが応えて、あとは二人で笑い合った。自分から声をかけて本当によかったとゆうかは思った。

ところで、手紙に何と書いてあったのか。「ぜったい、あそびにいこうね」だったそうだ。

(挿し絵・小出　茂)

■健康登山者投稿作品■

季節の絵手紙「たまには自分をほめる」

八王子市　峰尾里枝子 様

一歩一歩煩悩滅除

百八の階段を昇り、悩みや煩い事を取り除きましょう

三十四段　笑顔で始まり笑顔で終わる一日を

「和顔愛語」という言葉にもあるように、相手に対して笑顔で接し、思いやりのある優しい言葉を使う日々を過ごせるよう心掛けましょう。一日が笑顔で始まり、笑顔で終わることができたのなら、それは素晴らしいことです。

薬王院インスタグラム紹介

薬王院では、インスタグラムを用いて各種行事や四季が移ろいゆく風景を、写真や動画で御信徒様にお届けしております。

これからも様々な写真や動画を沢山アップしていきますので是非ともフォローをお願い致します。

下記のQRコードかURLから検索ができます。

TAKAOSAN_YAKUOIN

instagram.com/takaosan_yakuoin/

高尾山 季節散歩

和風月名　食物月「をしものつき」

十一月は「霜月」として知られておりますが、その語源には多くの説があります。その一つに「をしものつき」が縮まったとする説があります。

この時期には新嘗祭（にいなめのまつり）などの収穫を祝う行事が多くあり、自然の恵みに感謝する月となります。

今月の風物詩　菊（きく）

十一月は菊が見頃を迎える季節となり、「菊花展」などのイベントが全国各地で開催され、様々な種類の菊を鑑賞できます。

菊は仏花という印象が強いかもしれませんが、「高潔」や「真実」の象徴とされ、結婚式やお正月、長寿の祝いなど、祝い事にも広く利用されてきました。

百観音霊場巡礼(34)

厚木市　荒井 一雄

冬遊六角堂

樂中朝聖紫雲山
想法隆寺八角堂
群鴿飛行驚經讀
皇室人民互燒香

冬来たり
清楚恪勤（せいそかっきん）
鳩の嘴（くち）

冬、六角堂に遊ぶ

京に到り紫雲山頂法寺（ちょうほうじ）を参詣…
法隆寺の八角円堂（夢殿）を
想ひ出す…
鳩の群れが飛来すれば
我の読経を驚かす…
皇族も民衆も分けへだて無く
香を焚（た）く…

高尾山とんとん地蔵尊会来山

十月二十四日（木）

八王子に残る昔話の語り部の礎を築いた菊地正先生の命日に、先生を恩師と慕う方々が多数出席されました。

中興俊源大徳忌法要厳修

十月四日（金）

いけばなの心 56

華道教授　佐藤　宗明

花材：木瓜

立冬が近づき、花材も季節の移ろいとともに、青々とした草花から枝物が多く使われる時期となってきました。今回は、ボケを用いた生花（しょうかしょう）正風体（しょうたい）一種生の作品をご紹介いたします。

ボケは秋の終わりから春先にかけて市場に出回る花材で、近年よく使われるようになっています。その独特の曲がりくねった枝ぶりと、冬を越して春の訪れを待つ風情が魅力的です。

今回の作品では、「陰方副（かたぞえ）」という技法を用いて生けられています。ボケの枝は角張って伸びていく特徴があり、自然の力強さを表現するのに適しています。中心に真っ直ぐ伸びる真（しん）の枝と、そこから右へ大きく曲がる陰方の枝が一体となり、厳しい環境の中でも力強く生命力を感じさせる構成としてみました。自然の息吹と強さを感じて頂ければ幸いです。

星まつり祈祷のおすすめ

星まつりとは、毎年順を追って巡りくる九星にお祈りして、災厄を除き福運を招くご祈祷です。

高尾山では、**冬至に星まつり特別大護摩供**を厳修して、御信徒各位の諸願成就を祈念しております。

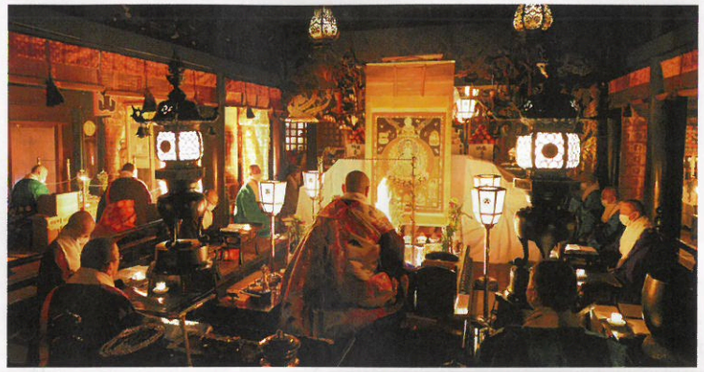
又、当山の星まつりの御札は飯縄大権現、薬師如来、不動明王の三尊を始め、殊に九星、十二宮、二十八宿等の諸々の曜星を網羅した星曼陀羅を内符として納めたお札で、御利益は誠に深重であります。

多くの御信徒の皆様にお申込みを賜わり、広大無辺のご加護に浴せられますようお勧め致します。

※年齢は来年の数え年（来年の満年齢に一歳加える）

ご祈祷料はお一人様千円。特別祈祷料は二千円以上となります。申し込み締め切りは**十二月八日**、冬至の祈祷終了後、お札を郵送致します。

祈祷申込希望の方はご連絡下さい。申込書や高尾山の御寶暦、振込用紙一式をお送り致します。



● 凶運 羅喉星	◑ 半吉運 土曜星	○ 大吉運 水曜星	◐ 半吉運 金曜星	○ 大吉運 日曜星	● 凶運 火曜星	● 凶運 計都星	◑ 半吉運 月曜星	○ 大吉運 木曜星
此の星に当る人は運勢潜む象にして諸事慎まざれば災難あり家内他人に口舌事多しなお病難に注意を要す信心堅固にして慎むべし	此の星に当る人は運勢漸く開くの象にして諸事準備なさば花綻ぶがの如くなれど怠らば災害事憂あり	此の星に当る人は幸運の象にして善業積めば目上の引立亦意外な利得あり口舌傷害などに注意すべし	此の星に当る人は運勢陰るの象にして黒き雲の為に清き月の光も隠るゝ如く何かと障りあり口舌争論傷害等用心すべし	此の星に当る人は盛運にして万事順調に運ぶ像なれども慢心すれば大吉反て凶となる信心して加護を得べし	此の星に当る人は疲労困憊の象にして災厄病難等に注意すべし信心して堅忍自重を要す	此の星に当る人は万事憂え多き象にして諸事思ふにまかせず至て心労多く損失離別病災などに悩む信仰厚ければ除災光明を得る	此の星に当る人は進展の象なれど過ぎたるはなお及ばざるが如しにして余り過ぎるは災いの基である信心怠らず精進すべし	此の星に当る人は除災招福の象にして万事好都合に運ぶなれど細心の注意を欠くと損失あり目上目下の意見を聞き性急を慎むべし
二 黒	三 碧	四 緑	五 黄	六 白	七 赤	八 白	九 紫	一 白
令和7年生 **1**	令和6年生 **2**	令和5年生 **3**	令和4年生 **4**	令和3年生 **5**	令和2年生 **6**	令和元年生 **7**	平成30年生 **8**	平成29年生 **9**
平成28年 **10**	平成27年生 **11**	平成26年生 **12**	平成25年生 **13**	平成24年生 **14**	平成23年生 **15**	平成22年生 **16**	平成21年生 **17**	**18**
平成19年生 **19**	平成18年生 **20**	平成17年生 **21**	平成16年生 **22**	平成15年生 **23**	平成14年生 **24**	平成13年生 **25**	平成12年生 **26**	平成11年生 **27**
平成10年生 **28**	平成9年生 **29**	平成8年生 **30**	平成7年生 **31**	平成6年生 **32**	平成5年生 **33**	平成4年生 **34**	平成3年生 **35**	平成2年生 **36**
平成元年生 **37**	昭和63年生 **38**	昭和62年生 **39**	昭和61年生 **40**	昭和60年生 **41**	昭和59年生 **42**	昭和58年生 **43**	昭和57年生 **44**	昭和56年生 **45**
昭和55年生 **46**	昭和54年生 **47**	昭和53年生 **48**	昭和52年生 **49**	昭和51年生 **50**	昭和50年生 **51**	昭和49年生 **52**	昭和48年生 **53**	昭和47年生 **54**
昭和46年生 **55**	昭和45年生 **56**	昭和44年生 **57**	昭和43年生 **58**	昭和42年生 **59**	昭和41年生 **60**	昭和40年生 **61**	昭和39年生 **62**	昭和38年生 **63**
昭和37年生 **64**	昭和36年生 **65**	昭和35年生 **66**	昭和34年生 **67**	昭和33年生 **68**	昭和32年生 **69**	昭和31年生 **70**	昭和30年生 **71**	昭和29年生 **72**
昭和28年生 **73**	昭和27年生 **74**	昭和26年生 **75**	昭和25年生 **76**	昭和24年生 **77**	昭和23年生 **78**	昭和22年生 **79**	昭和21年生 **80**	昭和20年生 **81**
昭和19年生 **82**	昭和18年生 **83**	昭和17年生 **84**	昭和16年生 **85**	昭和15年生 **86**	昭和14年生 **87**	昭和13年生 **88**	昭和12年生 **89**	昭和11年生 **90**
昭和10年生 **91**	昭和9年生 **92**	昭和8年生 **93**	昭和7年生 **94**	昭和6年生 **95**	昭和5年生 **96**	昭和4年生 **97**	昭和3年生 **98**	昭和2年生 **99**
昭和元年生 **100**	大正14年生 **101**	大正13年生 **102**	大正12年生 **103**	大正11年生 **104**	大正10年生 **105**	大正9年生 **106**	大正8年生 **107**	大正7年生 **108**

高尾山報助成金志納者御芳名(順不同・敬称略)

小平市　関　道雄
板橋区　(有)上信堂
八王子市　落合　義晴
いわき市　新藤　孝弘
練馬区　(有)大橋材木店
中央区　吉野　早苗
中野区　小杉　和義
八王子市　田中　武
相模原市　岩崎　優
富里市　森　照森
行田市　渡辺　宏
鴻巣市　大野　八郎
高崎市　中山　晃雄
甲府市　丸山　よし子
大田区　金子　慎太郎
板橋区　大沼　キエ子
練馬区　柏俣　晶子
府中市　菊池　ヨシ
八王子市　石井　征二
東大和市　中川　彰久
横浜市　佐藤　安久
比企郡　勝又　文子
行田市　岩崎　薫
郡山市　美濃部　良
八王子市　髙橋　秀男
国分寺市　やきとり　むさし
府中市　峰村　菊子
八王子市　倉石　芳和
相模原市　小野沢　波枝
佐野市　荒居　幸子
さいたま市　小谷野ちか子
行田市　松本　恵美子
新座市　彰山　粧麗
大野城市　納富　和彦
大月市　天野　喜宗
深谷市　根岸　憲司
港区　中川　兼造
八王子市　(一財)高尾保養院
町田市　小平　末喜
松本市　後藤　和一郎
江東区　秋葉　三重子
八王子市　吉田　利枝
札幌市　阿部　フミ子
〃　武田　雄二
港区　内山　秀雄
北区　橋本　操
〃　宝幢院
江戸川区　牧野　隆裕
大田区　武本　尚倫
〃　田中　良典
杉並区　須藤　晶
立川市　熊添　圭子
町田市　坂口　安宏
〃　梅原　良郎
多摩市　古屋　貴美子
相模原市　磯部　司郎
我孫子市　守屋　直
小山市　中村　宣晴
さいたま市　伊東　俊久
秩父市　横田　一郎
館林市　三宅　正基
福岡市　渡邉　光之助
八王子市　菱山　剛秀
千代田区　工藤　好子
国分寺市　西沢　満男
川崎市　谷口　順和
熊谷市　小田川　英之
伊勢崎市　山田　隆
前橋市　小池　武夫
松本市　寺澤　和男
姫路市　石原　攝子
八王子市　増山　進
武蔵村山市　(有)ウチノメンテ
相模原市　田中　ふみ子
足利市　加藤　清美
坂戸市　大室　忠行
狭山市　粕谷　仁一郎
深谷市　鈴木　一郎
秩父市　井上　操
太田市　高野　さき子
〃　市川　貴也
甲州市　中村　孝子
仙台市　弥勒　院
足立区　中山　恵司
八王子市　石井　功
相模原市　比留間　榮子
八王子市　角田　光一郎
〃　福島　元行
熊谷市　小沼　信夫
小金井市　出佐　隆
高尾山健康登山者一同

いろは天狗の落し文 46

せ

成功するも
失敗するも
自分の行動の
積み重ね

「責任を持つ」という言葉は様々な場面で使われます。自分が行動した結果、利益を得たのであれば享受する権利がありますが、不利益を齎したのであれば、その損害を減らす行動をとる義務があります。

自分が行動した結果が自分に跳ね返ってくるということを忘れずにいたいものです。

歳末の御護摩修行場所変更についてのお知らせ

十二月十三日に行われる「すす払い」、及び十八日の「おみがき」では、例年は両日の一部時間帯に於いて大師堂にて御護摩修行を行っておりますが、施設工事の都合で本年は奥之院不動堂で執り行います。大変ご不便をお掛け致しますが、ご理解ご協力のほど宜しくお願い申し上げます。

その際には堂内へご参列頂けますが、場所柄急な階段を昇ることになりますため、ご希望の方は信徒休憩所にてお待ち頂き、御護摩札をお取次致します。

御護摩は郵送でも授与しておりますので、ご希望の方は郵送御護摩係までお問い合わせ下さい。

登山だより

■十二月行事日程■

一日～七日
聖天秘供（聖天堂）

一日、十三日、二十五日
弁天秘供（御本社）

七日
月例写経会
（十三時山麓不動院）

八日
釈尊成道会（仏舎利塔）

十日
御詠歌勉強会
（十時山麓不動院）

十三日
山内大掃除（すす払い）

十八日
おみがき

十九日
納札供養柴燈大護摩供
（十三時祈祷殿広場）

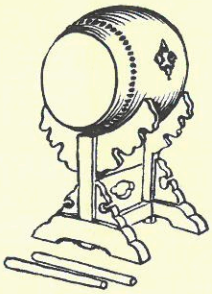
二十日～二十一日

星まつり祈祷会
二十日　午後五時開白
二十一日　午前六時結願

二十一日
飯縄様御縁日
神徳報謝百味飲食供
（九時大本堂）

二十八日
奥之院開扉供養（十時奥之院）

三十一日
大晦日・二年参り



毎日のお護摩奉修時間

午前９時30分
〃　11時00分

午後０時30分
〃　２時00分
〃　３時30分

ご講中・団体等御相談下さい。

新春特別開帳大護摩供

元旦御護摩札申し込み御案内

令和七年元旦、年の改まる一月一日の午前零時より高尾山では、新春特別開帳大護摩供修行が厳修されます。御信徒の皆様には、大本堂で執り行われるこの修行に参加されることを、お勧めしております。

御都合により高尾山へ御来山頂けない方につきましては、御護摩札を郵送にてお取り扱いをいたしております。

お申込みを御希望される方は元旦御護摩係まで御連絡頂きますと、申込用紙をお送りいたします。同封されている返信用封筒に、申込用紙を同封頂き、**十二月十日**までに必着するようにご投函頂きますよう、お願い申し上げます。

尚、元旦御護摩札の発送は、**一月三日**以降を予定しております。

■申し込み締め切り
十二月十日必着

■お問い合わせ先
電　話　〇四二-六六一-一一一五
ＦＡＸ　〇四二-六六四-一一九九
高尾山薬王院・元旦御護摩係まで

高尾山報助成金御志納のお願い

当山では、大護摩修行等により御縁を結ばれた御信徒様に高尾山報をご送付しております。

引き続いてご愛読して頂けますよう、皆様方の助成金御志納をお願い申し上げます。

発行所
東京都八王子市高尾町2177
大本山
高尾山薬王院
郵便番号　193-8686
電話(042)-661-1115(代)
FAX(042)-664-1199
発行人　犬山秀康
編集人　菅井倫浩
印刷　ヒラツカ印刷社
毎月１回１日発行
１部50円

下記のQRコードから高尾山薬王院のホームページにアクセスできます

高尾山薬王院ホームページ
https://www.takaosan.or.jp